



新編儒林文集

5
2221



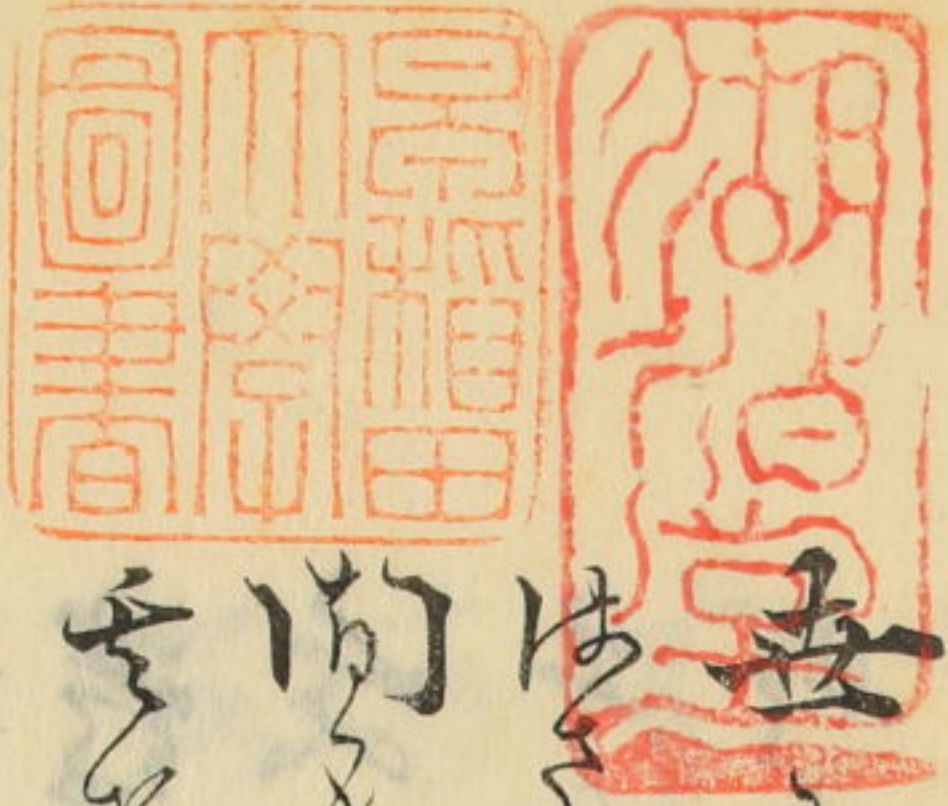
門利5
號222/
卷

著者尾野也山人輯

新編沈潜文集

江戸書林おる所刊本店より發售其年吉

明治四年四月廿四日
藤野氏寄贈



世の沈潜をいふもの少くあり沈潜の大名あり
はるるあるある其の解を以て沈潜と云ふ
向てか沈潜といふの光を其のみにあらし
そをいふもの少くあり沈潜の大名あり
混て其の沈潜をいふもの少くあり沈潜の大名あり
十の沈潜をいふもの少くあり沈潜の大名あり
沈潜の沈潜をいふもの少くあり沈潜の大名あり
沈潜の沈潜をいふもの少くあり沈潜の大名あり
沈潜の沈潜をいふもの少くあり沈潜の大名あり
沈潜の沈潜をいふもの少くあり沈潜の大名あり

福を乞ふ是を山信少陸和吟不継き
らる諸家の祝文を探りて其編
久々集りあるものな昔の文人の雅を美
ふら書けしと書世の世の諸家
としし目したあうの中あ行し様
充り近年祝世の業の盛りの所は
あふふふは聞くとそのめらるる多
華の筆力のか新とかわの
其人の多る醜美の世を
とて

お見えね侍るをゆ
お集りての
あつたを四本
祝のみの扱
後うさる
禪者

あひと年か
むら

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the name 'Walter de la Mare'.

新編俳諧文集上

蕪菴蟹守著



凡例

藤野深氏遺愛之記

一大和文章伐々れ多ありおぼゆる中不俳諧の
一 格と貞徳翁の宮られしうき蕪菴も亦一家
の風を身し門人ふ二三部の撰ありとそれの中
おも風俗文選も門ともよく人の識ることもあり
俳諧乃諸集せりみたりといへともをむらむら
俳諧文集と号書とを来強て著すものたし
おのれ嚮りおもひきつるりむして西ふといへ
権歴の折々法家ふと来て数章を志す

上凡例

是るを女門に全編をさんめらたら
さふりまふふさふへいあつたれと
あく蠹乃巢とあく果人もほいあさん
頻く増補して文選よりあつた古人を
録し當時の作者をも書載をれをう
一編のやうみあはるちあ季

一此編古今の人を霄塊して卯年曆の次牙を
ころんとくとも文章の體裁分転をあつた
る諸神ひつふふあつたあさふあ
一此度別不発句撰上本の折く敢て一雙あ
ものあもあつたあつた編も亦推あ

どむへいして例の書房の心あつたひう
わて五月あ川の海き源さあもあつた
あつたあ流さあ一ああああああ
あつたあああああああああああ
あつたあああああああああああ

高野聖古
眼射集序
無林
古書館真記
二十
山
山
山

目録

新編俳諧文集上

目錄

駒墳集序 京
 高館懷古 江
 桃李集序 京
 丹布多比鳥序 カ
 虎画讚 京
 新小菴序 江
 何帑集序 江

爾更 京
 蓼太 江
 燕村 カ
 葛里 カ
 重厚 京
 巢北 江
 成美 江

姨捨山賦
 二十歌仙序
 芭蕉翁真跡序
 其唐松後序
 茶摺小木序
 十時庵再勸進帖序
 無名鳥題言

樗良 イセ
 曉臺 スリ
 士朗 スリ
 敲水 カ
 乙二 カ
 道彦 江
 葛里

新編俳諧文集下

目錄

端津久亭 京
 瓢藏銘 京
 犬坊主傳 三
 送友人西遊序 カ
 蟬辭 セ
 息杖辨 江
 毛蓼說 ア
 二十歌仙序 カ

月居 京
 雪雄 京
 卓池 三
 蟹守 カ
 桐栖 セ
 豪山 江
 路宅 ア
 采耜 カ

炭說
 茶隱書画帖序
 芙蓉扇賦
 其夕女句帖序
 豆太鼓頌
 紀行
 名月辭
 書画帖跋

椿堂 イセ
 篤老 ア
 瀾古 カ
 玄蛙 ア
 寥松 江
 鳳郎 ア
 圭雨 ア
 魯隱

下凡例

三

俳諧古今説	井里 <small>イセ</small>	雜文	泥中 <small>カキ</small>
秋月序詞	鶯笠 <small>江戸</small>	楨小庭記	寥松
雨中此詞	木蓁	紀行	蟹守
夕顔頌	少翁	蟬説	一飛 <small>カキ</small>
朝起論	真貫 <small>カキ</small>	國見平記	真洞 <small>カキ</small>
送鷹園主東遊序	静管 <small>カキ</small>	小築記	對山 <small>江戸</small>
自誠	護物 <small>江戸</small>	折筭銘	寥松
住吉御田記	鶯笠		
憎鳥辭	蟹守		



新編俳諧文集上

菴庵蟹守著

駒墳集序

園更

世のかみとせ銭の翁甲斐う根み杖をわくし多さ
 象此氷とけそめしより妻も日あかり月ふらり
 つり約の妻ふたを倚る家の間乃やとりこころ
 旅の哀ゆゑく暫時百景の旁因ぬハ古人ととも
 腸をそくさ山里の多れ仮の宿と鬼の皮紙巻
 つれと童子をも慰め給ひあるよ〜風流さ海〜
 ある中子馬蹄玉のよりとるあさめ〜もあ〜
 されハかの言祿を得ふと〜久子載不汚の正風を

上

一

あふき遠近の好士の句々を中々知て駒墳集を
選んりやを著る三車主人の顔意をぬくみて
老懶おれ眠をむくき十う一をふに嗜抹を依の

姨捨山賦

樗良

更科の月めくくある秋八月八日の叔姨捨山小宅まに
鏡臺山を冠りきけのむうふたたり筑摩川花やうに
簾をめぐり雲井のうを名のくくく水上の月とやうに
田毎のあおきとひく山の松風ふあくわたり宝う池
桂う池更科川をく流稲荷山八幡の里川中流を
ふあつふあつ居ふんえかくは吹風精神をせめあ

あ〜〜見もの目めうこをてあそれあり粥をきくときや
煙々志々〜〜石上めんをきあひ

高館懐古

蓼太

最後の戎衣一ふあきほり平泉のさうんあるをらんた
大後小車の行ちをぬるあるた右の歌くを軒むひひ
ち〜〜ららさう〜〜い〜〜あては機のを〜〜ふあつまれば
人も顔あ〜〜しうさうてふひのち行らんもあ〜〜にたけき
もの〜〜ふら金輪ぬあ〜〜うたをやうある女房ハ銀簪を
かきた糸あゆる柳のあ所をみ〜〜り小琴の音を
たやきた風うはは伽羅乃あ所あを袖をむく〜〜

上

二

裳をかゝり四方如風色をひらき、衣の愛ハもろと
もにまゝまゝのものをして和泉或詠り離情をつくし
衣川ハたゞとまてこそ波をうちあれと源の重之り
涙をそくちり流さるも結さし月の山ハあられり
湧白山を雲れわけ海のをたけり山室根山たそ
志福山を花の雲みそひえいふせのまゝりハ時多れいふ
せ鳴ありいそみの軍とまき志ろみ金鷄山ハ曉を
報して時多のほみをとまるり似たりと毛越寺
の堂塔四十余禪房五百余宇中尊寺金色堂經
堂吉祥堂ありける神社佛閣山く日映一月小
かやくふんつくむもの柵を義士和泉三郎の装ふ

して碧流岸をうら水上川小流て言報ふそめり
源廷尉耳かいつきたる屋敷くく衆星れ小辰を
遠るくかくあゝあまかゝふまろつまいて秀衡一門の榮
耀更ふいあへくもわくは口をあまんとあめを鳳を裂
麟をほつる目をよろこぶむるある炎乙乃梅花
玄冬のさつちもまてころのまきたおられしとよを厚小
鶴を九阜みちちちとみ子秋を楓飛ハ十符の浦小
万代をころつきしもたし今きり

山そひえ川あられりあ葉の風

二十歌仙序

曉臺

吳道玄龍を画て鱗甲うこき忽烟霧起て雨を
くく煙霧龍を生せ龍烟霧をむく人まをた玄
何そ龍と画ん龍も又其人を好てあるもの一龍
奇をあしひより妙をあは奇なるも妙あり其龍天
のひるうねを玄龍といふ桃青二十哥仙ハ画龍あり
画龍ありそのうち玄龍あり冬の日五哥仙ハ画龍あり
世上今画龍を身まきして何まのまあり玄龍とわ
免む

桃李集序

蘇村

心の子わらわの五哥仙四時口まきわらわ仙秋をうせぬ
友をうせぬのとりぬま人法をまふあうんとつひま人制て
曰世哥仙ありそやく年月を強うおそくくは流り
おくれうんそ等て曰世哥の流達あるや実ふ流り
及て流行おした人ハ一國郭お流りて人を追ふて
走るうこし先まもの流て流れたるもの追ふ
子似たり流り先後何と流てまのハ入んや只日
くおあられ胸懐をうしおてらあをまあのおん
あして翌日又わらわ流行あり題しそま

上

四

あはれき人里めくりうめももしあし
あはれ世集
結大意あり

芭蕉翁真跡序

士朗

本間老人の家小芭蕉翁の記念あり茲迄不指て
向より本末の月を侘たすひーより縮刈りけー露
秋の露よふさよふ菊の白いふさむく酒志ひあふ
誠人の居阿弥陀坊を務ひ事であうくと吹秋風
みりあのかさみさる傳りぬむー重衡と典侍の局よ
ころぬあふ阿弥の髪をうひ切てられを記念す
此後正よとせなり強へさ家あうりむをあらうとも

さうあき筆おれらそそと水鏡をぬされうりされい
筆の秋あうてかきみさふあまふまのさあし
おもへはらうあもあこそれもあうー枯舟の葉は
下字おぬあうんりのそん兼たきとそやうと横あふ
急をうけていふく不汚と縁へはあり老人の深切さを

丹布奈比鳥序

葛里

それ能備をらうの巻ありたえい月あのみあ
後ろひやましく鏡のうけのよく物とらうのまらあし
それう中よ不易あは流りよそ志をうくもとそま
らひさむもも定とたあかの造物者の無是

花あれをまゝくしかして目もくもくもく平感ある
有りわれはあけあくも天骨あくもくもくあきあ
色も渡りあきあきありあきあきあきあきあきあ
那多祢のあきあきあきあきあきあきあきあきあ
わくわくあきあきあきあきあきあきあきあきあ
て不易の心を渡りあきあきあきあきあきあきあ
ある色をまゝくもくもくあきあきあきあきあきあ
繁のあきあきあきあきあきあきあきあきあきあ
あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあ
乃きあきあきあきあきあきあきあきあきあきあ
さく人あきあきあきあきあきあきあきあきあきあ

和名布て婦年年と渡りあきあきあきあきあきあ

其唐松集後序

鼓氷

人あきあきあきあきあきあきあきあきあきあ
髪とあきあきあきあきあきあきあきあきあきあ
遠き庵のあきあきあきあきあきあきあきあきあ
あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあ
いあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあ
らあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあ
の下あきあきあきあきあきあきあきあきあきあ
あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあ

上

六

虎畫讚

重厚

虎ハ五百歳に齡ありて山獸の長なるも由きかりも
武士に箭先をおき倚りて其掌大なるありし
されとなましく狗子を喰ひて其骨を忽碎りて其骨
をもて狗子に盧の酒とて以て彼の野に
馬碎木のあわする事似されし必しも其まじり
しとみ落して強小地獄の底に夢りてされ赤
鬼の噴鼻をうけりてくわくわくと其後
む

茶摺小木集序

乙二

そも爰はをりてきものわたりし 東風我晴窗
夢載て吹落せ江湖白鳥の色とつくりし 碎仙も
天曆の帝の滋野内侍うきよみき人やはつくと
名句も枯野をうけゆる翁のわたりも死ん越
人々も池塘喜草小惠連と思ひせし 名詩も
呂翁の囊中の枕とりて美梁と炊く雪小榮進と見
し 堀里紀五十夢のうらみ珠と鼓年梅も
と世縁紫のわけゆの國鶏野の素も爰なりて
きものわたりし 爰子故折小瀬田の浮橋をうけり

そとらさるよひありきて 園の堂佛幻庵の古き松を
清みわさし一の傍と几母憑りて 塔焉とておさしぬ
羨子やをらさしよとて 伽藍の一ちををらふまは
曰はるりハ梅ありも葉すり小本公と待事梅すり
おちぬとも世句を函執雅致新奇をふらりぬの茶
まり小本をさしく清く工案のたまけとせよとて
かき消しうせぬ羨も又片めぬうれ江淹り彩色を
ゆりかの文藻まきくさうんあさうぬく芝のまを
庭下膝とあしう盧仝り七碗腋下平 清風を
生し曉臺り露ゆくさの茶一盞の淡生涯雅の人
うらみめてさうん世集やあふら海の川浪月とて
たえて世を照し羨子ありうきん志のあは山乃
豈志のさうんたやも

新小庭序

巢兆

水田北原のあはる居るもの陰ふおひしき
さしきひしきあはるあはるのまは中あはるうに大き
くそけり浪あはるぬをを存あはるもいあはる人の
をししきしきしきしきしきしきしきしきしきしき
を存しきしきしきしきしきしきしきしきしきしき
坂東ちきりしきしきしきしきしきしきしきしきしき
らやしきしきしきしきしきしきしきしきしきしき

上

八

書るおもひけりてあつも紙物の文字をもちひあつ
例のふるみみ落さる焼曲あるへーあれ平
と此寺の能者のこころもをつみ入まてこれに清濁
彩色のとりこみぬらうも嵐雲のそのくちあつも
たこの中におおひこるこりいままじいまはわー
さうりもわれと囊を括る平とうあわーとうや
さうおらぬまていさういさうはしをさるー
唇をつくりみ侍る

無名鳥集題言

葛里

春の目のあけ木の下をさうり秋の目のあけ木の下
にやうる其美景みむくそ對代もあつまわー
うらふおのつう天極ありさうらわさくとをのや
自適守られほひのむらあり不さ山あつて
ものさわししきあけーきやのさうまあひまて人
のあけもていひ長けへきものくま秋を更なり
夏の目も照りさうさうあも冬は秋の降あけあも
只世山をさるれ世の中は困苦をもさうれ服た
さうさ幸もあつてあん那さうさあさあさあさ
あつ川あり東坡居士乃本持あれを五十とせ
いさうて百年の樂みあつてさうのさうれある

上

十一

